

なす栽培のポイント（接木苗）

◆本畑の準備

土は肥沃で保水、排水のよい所がよく土壌酸度は pH5.5～6.0 位。

①施肥量（例）

（kg/10a 当たり）

肥料名	基肥	追肥	使用時期
堆肥	4,000		定植予定 1 ヶ月
苦土石灰	120		
菜種粕	60		定植予定 1 週間前
CDU たまご化成 S555	80		
BM 苦土重硝酸	20		
燐硝安加理 S604		20kg×5回以上	収穫開始後 20～10 日ごと

②栽植距離

うね幅 200cm 前後 株間 60cm 前後

③定植準備

堆肥・苦土石灰は定植予定の1ヶ月前位に施し、耕耘して土壌と十分になじませておく。定植予定の1週間前位に肥料類を散布、耕耘し、ベット幅100cmのうね（高さ10～20cm）を作り、黒マルチを張り、定植時まで地温が確保できるようにしておく。

④風害対策

暴風網設置（ソルゴー利用でも）

◆定植

晴天で風のない穏やかな日を選んで定植作業を行いましょう！！

苗には、定植前に液肥灌水を行い（苗を液肥にドブ浸けしてもよい）根鉢部分に着果までの栄養分を持たせておく。植え穴をあけ粒状殺虫剤（アドマイヤー1粒剤など）を施し、よく土壌混和しておきかん水する。

定植は深植えしないようにし（接木部分は必ず表面上に出すこと）、根鉢と植え穴の隙間に土を入れるとともに根鉢の上に軽く土をかけ、乾燥を防止する。 落ち着きの水を少量かん水する。定植後は苗がぐらつかないようにすぐ仮支柱を立て誘引する。

◆定植後の管理

①着果の促進

定植後、苗がしおれるようであれば、手かん水で株元に確実にいき、順調な着果を促す。

②整枝

1番花の直下から発生する芽を2本残し、それ以下のわき芽は早めに摘み取る。これらの中から良好な枝を3～4本親枝とする。

③ホルモン処理

1番花よりトマトーン50倍液で単花処理を行い、確実に着果させる。（着果させることにより樹勢が旺盛になりすぎるのを抑制することができる。）

樹勢の強弱により1番花の収穫を早めたり、遅れさせたりし、樹勢をコントロールすることができる。夜温の低い時期は自然着花しにくいので5番花くらいまでは単花処理し、着果肥大促進させる。) 開花当日~2日後の花にハンドスプレーで正面から軽く散布する。暑い時間帯にはしないこと。(薬害) 同じ花には重複しないこと。また、2~3日に1回は処理を行うこと。

④支柱立て・誘引

枝が伸びてきたら、支柱に横ひも(マイカー線など)を張り、主枝テーブナーでひもに誘引する。

⑤追肥

一番果収穫時頃からはじめる。燐硝安加理S604を通路部分にパラパラと散布し、乾燥している時は、肥料が早く効くようかん水する。

⑥敷きわら

梅雨明けの乾燥防止と地温上昇防止のため、また雑草の抑制のために通路部分に敷きわらを行う。

⑦摘葉・摘枝

1番花の収穫の頃、下葉から徐々に取り始めるが強樹勢のときは早目から行う。1回目の摘葉枚数は1~2までとする(1度に何枚も取り過ぎると、樹勢が弱くなったり、果実肥大が悪くなったり、果実が曲がりやすくなったりするので注意)。通風、採光や樹勢を考えながら行い、果色、着果、肥大に注意しながら随時行う。老化した葉や、混んだフトコロ枝は適宜に取り除き通風、採光を良くしてやります。8月中旬頃フトコロ部分の枝や、葉をやや強めに間引き剪定を行うことにより10月上旬までに良品が継続して収穫できる。

⑧梅雨明け後のかん水

水分不足はボケなす(つや無し果)の発生や樹勢低下、収量低下につながる。乾燥しているようであれば、風路部分に十分にかん水をする。

◆病害虫防除

適正薬剤による初期防除を励行します。特にハダニに要注意!(コテツフロアブル、アファーム乳剤など)

◆収穫・収量

一番なりや2番なりは、早めに収穫したほうが枝の生育はよくなる。また収穫は、朝か夕方方の果温が低いうちに行うと、色つやがよく肉質も柔らかい。収量は10a当たり3,000~4,000kg位です。

